

国際理解教育/開発教育 学習指導（活動）案

【実践者】

授業者氏名	鈴木 達也	学校名	星の杜中学校・高等学校
教科（科目）・領域	社会科（地理的分野）	対象学年（人数）	1年 Luce組（27名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年11月28日（金）		

【実践概要】

1. 単元名(活動名)： 世界の諸地域（アフリカ州）					
2. 実践する教科・領域 中学校 社会科（地理的分野）	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）					
<ul style="list-style-type: none"> ・ 諸資料をもとにアフリカの教育問題やその背景にある貧困や文化的な要因を、SDGs と関連させて理解する。（知識・技能） ・ アフリカの教育問題やその背景にある貧困や文化的な要因を多面的・多角的に考え、よりよい国際支援のあり方について考察し、自分の考えを論理的に表現する。（思考・判断・表現） ・ 国際社会の課題を「自分事」として捉え、持続可能な社会の実現に向けた国際支援の在り方について、自ら積極的に探究する。（主体的に学習に取り組む態度） 					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	諸資料をもとにアフリカの教育問題やその背景にある貧困や文化的な要因を、SDGs と関連させて理解できる。			
	②思考・判断・表現	アフリカの教育問題やその背景にある貧困や文化的な要因を多面的・多角的に考え、よりよい国際支援のあり方について考察し、自分の考えを論理的に表現できる。			
	③主体的に学習に取り組む態度	国際社会の課題を「自分事」として捉え、持続可能な社会の実現に向けた国際支援の在り方について、自ら積極的に探究しようとする。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
<p>生徒が「自分たちの価値観」だけでは国際問題は解決できないということに気づききっかけを得る。「教育」という身近なテーマを入りに、SDGs の各目標が複雑に絡み合っていることを学ぶ。そして、「日本からの支援策」を考えるとという活動や単元の終末の「皆さんが考えた支援策で、本当にアフリカの人たちは幸せになりますか？」という切り返しの発問によって、生徒たちの多面的・多角的な思考を促す。これにより、生徒たちは国際協力の難しさや奥深さを実感するとともに、一方的な支援ではなく、現地の文化や習慣を尊重し、共生を目指す姿勢の重要性について考える。この学習を通して、グローバルな視点と批判的思考力を兼ね備えた、未来の国際社会を担う人材の育成を目指す。</p>					
【生徒観】					
<p>本学級の生徒は男子7名、女子20名の合計27名である。第3学年になると海外研修旅行を控えており、また高等学校における生徒の約40%が半年～1年の中・長期留学に参加することから、近い将来に海外渡航を経験する生徒である。</p>					
【教材観】					
<p>本単元は、学習指導要領社会「2 内容」の「B 世界の様々な地域」の「(2) 世界の諸地域」を受け</p>					

て設定した。空間的相互依存作用や地域などに着目して、主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して、世界各地で顕在化している地球的課題は、それが見られる地域の地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解したり、地域で見られる地球的課題の要因や影響を、アフリカ州という地域の広がりや地域内の結びつきなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現することが求められている。

アフリカ州の教育問題の複雑さを捉えるため、ウガンダを事例とする。初等教育無償化による高い就学率という成果（光）と、その裏にある低い修了率や教育の質の課題（影）を、統計資料や写真で対比的に示す。これにより、生徒が課題を多角的に発見できるようにする。

次に、JICA等による学校建設（ハード面）から教員養成（ソフト面）まで、国際協力の多様なあり方を提示する。その上で、良かれと思った支援が意図せぬ問題を生む事例を投入し、支援の難しさや多面性に気づかせたい。

【指導観】

この単元を通して、生徒が「かわいそうだから助ける」という一面的な視点から脱却し、現地の文化や人々の自立を尊重する視点から、「本当に必要な支援とは何か」を主体的に探究させることを目指し、生徒が海外渡航をした際に、多面的・多角的にその国の現状を感じてほしい。

単元を通じた課題解決型学習を実現するため、ワン・ペーパー・ポートフォリオ（OPP）シートを活用する。これにより、生徒が単元を貫く学習課題を常に意識し、各時の学習に取り組み、単元終末の表現活動に生かすことができるようにする。

7. 単元計画（全4時間）			
時間	ねらい	学習活動	資料など
1	SDGsの17のゴールには関連性があることを理解する。	○教育を受けられないことによって生じる影響について話し合い、ウェビングマップにまとめることで、SDGsのゴールそれぞれが関連しあっていることを捉える。	・SDGs 関連資料
2	アフリカ州の特色を自然地理的、人文地理的な側面から理解する。	○教科書や地図帳などの諸資料から、アフリカ州の特徴を白地図にまとめる。 ○単元を貫く学習課題を設定する。「なぜアフリカには学校に通えない子供たちがいるのだろうか。私たちにできることはあるのだろうか？」	・教科書 ・地図帳 ・白地図
3	事例として取り上げるウガンダの教育の現状について諸資料に基づき考察する。	○ウガンダの教育の現状について、情報を収集、整理、分析し、Xチャートにまとめる。	・就学率、識字率、写真など
4	前時の学習を踏まえて、日本ができる支援策を考える。	○アフリカ州の教育水準の向上のために日本ができる支援策について話し合う。 ○単元を貫く学習課題について、自分の意見をまとめる。	
5 本時	切り返しの発問をもとによりよい教育支援の在り方について考察し、単元の学習を振り返る。	○自分の意見を他者と共有する。 ○新たな資料をもとに「あなたが考えた支援策で、みんなが幸せになるのか」という視点で話し合う。 ○単元の学習を振り返る。	・ODA 資料

8. 本時の展開（概略）

本時のねらい：持続可能な社会の実現に向けた教育支援の在り方について、教育支援が社会の課題を解決するための糸口になりうるということを多面的・多角的に考察する。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	1 本時の学習の流れを捉える。 T「今日は、単元のまとめの授業です。よりよい教育支援の在り方について考えていきます。」	・学習の見通しをもてるようにするため、1時間の流れを黒板等に掲示する。	

<p>展開 (35分)</p>	<p>2 前時に考えた教育支援の方法について意見交換する。 T「前の時間に考えた教育支援の方法について意見交換をします。意見交換はワールド・カフェの方法で行います。」 ・学校を建てる ・先生を派遣する ・資金援助を行う ・ICTの技術を伝える</p>	<p>・短時間で多くの他者の意見と触れられるようにするために、ワールド・カフェ形式での発表を行う。</p>	<p>資料①ウガンダの教育課題</p>
	<p>3 実際にウガンダで教育支援を行っている青年海外協力隊・小田さんの事例を取り上げ、小田さんがどのような取り組みをしたかを考える。 T「この人物は、ウガンダで教育支援を行っていた青年海外協力隊の小田さんです。ウガンダには資料①のような教育課題がありました。小田さんはどのような取り組みをしたと思いますか。」 ・先生を増やすためにポスターを作る。 ・英語の授業を増やす。 ・日本の体育の授業をした。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>①教員不足と大規模クラス 1学級に100人を超えるクラスもあり、教員が不足している</p> <p>②言語の壁による学力差 授業は英語で行われるので、英語の理解度に差がある子どもたち間で学力格差が生じている</p> <p>③カリキュラムが未整備 特に体育においては、長い間カリキュラムが整備されていない</p> <p style="text-align: right; font-size: small;">参考：JICAマガジン (https://jicamagazine.jica.go.jp/article/7fd=202312_11s)</p> </div>	
	<p>4 小田さんの取り組みを知ったうえで、第1時に作成したウェビングマップを見て、自分たちが考えた支援策や小田さんの取り組みによって、ウガンダの社会にどのような効果をあたえる可能性があるかを考える。 T「小田さんは次のような取り組みをしました。」 T「アフリカ州の学習の最初に、皆さんが作成したウェビングマップを見てみましょう。自分たちが考えた支援策や小田さんの取り組みによって、ウガンダの社会にどのような効果を与える可能性がありますか。」 ・子どもたちが、家事をすることなく、学びに集中できそう。 ・様々な産業が生まれて、モノカルチャー経済ではなくなりそう。 ・経済発展して、貧困から抜け出せそう。</p>	<p>・国際的な課題の要因が複合的であることを考えられるようにするために第1時で作成したウェビングマップを参照させる。</p>	<p>資料②小田さんによるウガンダの教育支援</p>
		<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>①授業の工夫 算数の授業で折り紙を使い、図形を楽しく直感的に学べるようにした。言語の壁を越えて学習する有効な手段になった。</p> <p>②体育教育の実践 子どもたちに体を動かす楽しさや、ルールを守って協力することの大切さを教えた。</p> <p>③文化交流 習字や七夕といった日本文化を紹介。子どもたちの視野を広げ、様々な価値観を尊重する心を育てる。</p> <p style="text-align: right; font-size: small;">参考：JICAマガジン (https://jicamagazine.jica.go.jp/article/7fd=202312_11s)</p> </div>	

			資料③第1時に作成したウェビングマップ
<p>まとめ (10分)</p>	<p>5 単元の学習を振り返る。 T「アフリカ州の学習を通して、あなたが感じたこと、考えたこと、疑問に思ったことを書きましょう。」 ・社会問題はつながっていると思った。 ・教育支援によって解決できることは教育だけではないと思った。 ・支援を行うことは、もしかかもしれないけど幸せになる人が増えるのかもしれない。 ・他の国ではどんな支援が行われているか疑問に思った。</p>	<p>・文章記述が進まない場合は、「みんなが幸せになる国際支援」という視点を与える。</p>	

<p>9. 評価規準に基づく本時の評価 (評価方法)</p>
<p>持持続可能な社会の実現に向けた教育支援の在り方について、教育支援が社会の課題を解決するための糸口になりうるということを多面的・多角的に考察できているか。(振り返りシート)</p>
<p>10. 学習方法および外部との連携</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・グループ活動 ・JICA 提供の諸資料
<p>11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修における授業実践の報告

【自己評価】

<p>12. 苦勞した点</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・授業時数の変更に伴う計画の圧縮 当初の計画よりも単元の授業時数が1時間少ない状況での実施となり、全体的なタイムマネジメントに苦勞した。 ・活動量と授業時間のバランス 単元のねらいを達成するために必要最小限の活動を維持したが、50分という限られた枠に対して学習活動が多くなってしまった。その結果、本来であれば生徒同士で支援策を伝え合う時間を十分に確保できなかったものの、進行を優先せざるを得なかった。
<p>13. 改善点</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・考えたり、意見を伝え合ったりする時間の確保 活動量の多さから、生徒同士が互いの意見を共有・深化させる時間を十分に取ることができなかった。

08 鈴木達也 星の社中学校・高等学校・1年・社会

また、自分たちで考えた支援策を深めるプロセスを重視するため、活動ごとの配分を見直し、生徒がじっくりと思考を巡らせる余裕を持たせた展開にする余地がある。

14. 成果が出た点

- ・ウェビングマップ活用による学習の連続性
単元の導入で作成したウェビングマップを終末段階でも再利用し、「自分たちが考えた支援策や小田さんの活動が、ウガンダ社会にどのような効果を与えるか」を書き込ませる活動を行った。これにより、単元を通して考えることが明確かつ一貫したため、単元のねらいから逸脱することなく学習を進めることができた。
- ・思考支援とグループ活動の活性化
視覚的なマップを用いたことで、生徒にとって思考の整理がしやすかったようである。グループ活動においても、ウェビングマップが共通の足場となり、生徒たちがスムーズに意見を出し合い、活発に活動に取り組む姿が見られた。

15. 学びの軌跡

「日本と遠く離れているアフリカ州の国には、深刻な問題が様々あり、それらがいまだ解決されていなくて、日本では当たり前のことも特別だったりすることが多いので改めてありかたみを感じました。これらの問題解決にすけて取り組んでいる人々国々がたくさんいるあることをふまえて、自分自身にもできることがないかを考えて生活したいです。」

「世界的に見たら、教育を受けられない子どもがたくさんいることは知っていたけど、授業料が無料になったことで十分な教育を受けられなかったり、カリキュラムが悪いなどの、たくさん問題があることを知ったので、寄付など自分にできることをしたいと思った。」

「アフリカの学習を通して、アフリカのどんなところでどんなことが起こっているかを知れて、自分なりに解決案を考えることができました。解決などを教える中で1つのことが解決できても他に課題があったり、新しい課題が生まれてきたりしました。自分の国とはちがう問題があることを、改めて認識できました。」

16. 授業者による自由記述

本単元では、アフリカ州の抱える課題について、現状を知るだけでなく、その解決策を生徒自身が多角的に考察する活動を取り入れた。生徒の振り返りに見られるように、生徒たちは課題解決の難しさや、事象の複雑性・連鎖性に気づくことができた。例えば、教育普及のための「授業料無料化」が、逆に「教育の質の低下」や「施設不足」という新たな課題を引き起こしている現状など、物事を一面からではなく多面的・構造的に捉える力が養われたと考える。

また、学習を通して日本とアフリカの環境を比較し、自らの置かれている環境のありがたさを再認識する姿も見られた。特に、多くの生徒が「知る」段階にとどまらず、「寄付など自分にできることをしたい」「自分自身にもできることがないかを考えて生活したい」といった、主体的な行動変容への意欲を示した点である。遠い地域の課題を、自らの生活と地続きの問題として捉え、その解決に向けて主体的に関わろうとする態度の変容は、本単元の大きな成果である。

【参考資料】

・ JICA マガジンホームページ https://jicamagazine.jica.go.jp/article/?id=202312_11s